

# 大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検討

——校内・外の居場所感について——

高野恵代・池田龍也・水口啓吾

The relationship between aversion to school, tendency to neglect one's schoolwork and ibasyo in undergraduate students: ibasyo inside and outside the university

Yasuyo Takano, Tatsuya Ikeda, and Keigo Minakuchi

In this study, Minakuchi, Takano, and Ikeda (in press) investigated the relationship between three types of students extracted from students' dislike of school and their tendency to neglect studies - (a) students who desired to transfer to a different university, (b) students who were inactive and negligent of their studies, and (c) students who adapted to college life - and ibasyo inside and outside the university. The subjects were 298 university students (106 men, 191 women, 1 unknown). One-way analysis of variance (ANOVA) was conducted with the three types of students as the independent variable and ibasyo inside and outside of school as the dependent variable. The results revealed that compared with other groups, (a) students who desired to transfer to a different university felt they did not have ibasyo within the school. Next, a  $\chi^2$  test of the existence or absence of ibasyo outside school and the type of students was performed. No significant difference could be observed. This study suggests that support is needed to create ibasyo within the school for (a) students who desired to transfer to a different university.

キーワード：unwillingness to attend school, academically unmotivated feeling, ibasyo

## 問 題

近年、我が国において青年の無気力や引きこもりなどの退却的傾向が問題になっている。福田(2000)が実施した不登校実態調査によると、1.2～2%の大学生が不登校状態にあると推定されている。大学生特有の無気力状態については、“スチューデント・アパシー”が有名である(笠原, 1976; 鉄島, 1993; 下山, 1995)。しかし、無気力状態とは言っても、生活全般が無気力になるわけではなく、学業では無気力でも、アルバイトやサークル活動など学業以外には積極的に取り組む学生も存在すると指摘されている(笠原, 1976)。また、大学生の大学生活そのものに対する意欲低下が、スチューデント・アパシーを引き起こす危険性があるとされている(下山, 1995)。そのため、学生が大学に関してどのような感情を抱き、どれ程の満足感を抱いているのかといった感情の度合いが、学生の意欲低下とどのように関連しているのかを検討していくことは、重要な課題である(池田・水口・

高野, 印刷中)。

そこで, 大学生における学校嫌悪感情および怠学傾向, そして居場所の関連を検討するにあたり, 池田・水口・高野 (印刷中) は, 大学生における学校嫌悪感情および怠学傾向, そして居場所の関連を明らかにすることを目的として, 意欲低下領域尺度 (下山, 1995) および学校ざらい感情測定尺度 (古市, 1991) の因子構造を検討した。結果, 意欲低下領域尺度は, 「学生生活意欲低下」, 「授業意欲低下」, 「学習意欲低下」, 「注意散漫」の 4 因子であり, 学校ざらい感情尺度は, 「大学嫌悪」, 「転出希求」の 2 因子であることが示された。この結果を踏まえて, 水口・高野・池田 (印刷中) は, 大学に対する嫌悪感および怠学傾向による類型化を行い, 各類型における特徴を検討した。クラスター分析の結果, 3 クラスター解が抽出され, それぞれ, 「転出渴求群」, 「不活発怠学群」, 「大学適応群」と命名した。「不活発怠学群」は, 学業面における不満や不安を抱きつつも, アルバイトやサークル活動など学業以外の場面で人間関係や居場所を作ることで, 大学生生活への適応を図っていることが推察された。一方, 「転出渴求群」は, 大学における居場所の無さを認識しているだけでなく, 大学自体への転出願望も強く抱いていることが推察された。水口ら (印刷中) は, 大学の授業や勉学に対する不満よりも, 大学における対人関係や, 大学における居場所のなさが学校への嫌悪感情や所属意識の強さに影響を及ぼしている可能性を示唆し, その危険性にも言及した。

そこで, 本研究では, 水口ら (印刷中) で抽出した嫌悪感と怠学傾向における 3 クラスター解をもとに, 大学生生活における居場所の有無との関連について検討することを目的とする。大学生生活における居場所は, 大学内での居場所と, 大学外での居場所に分けて考えることとする。なお, 居場所とは, 物理的な意味だけではなく, 心理的側面も包括している。よって, 本研究における居場所とは, 則定 (2008) が“心の拠り所となる関係性, および安心感があり, ありのままの自分を受容される場があるという感情”と定義した心理的居場所感と位置づける。

## 方 法

**研究協力者** 池田・水口・高野 (印刷中) と同様であり, 国立 A 大学の大学生 298 名 (男性 106 名, 女性 191 名, 性別不明 1 名) を対象とした。対象者の学年は, 学部 1 年生 93 名, 2 年生 57 名, 3 年生 133 名, 4 年生 10 名, 博士課程後期 1 年生 1 名, 研究生 1 名, 学年不明者 3 名であった。

**有効回答者** 水口他 (印刷中) と同様で, 後述の質問紙に欠損のない者 285 名 (男性 105 名, 女性 179 名, 性別不明 1 名) を有効回答者とした。有効回答率は 95.63%であった。

**尺度構成** (1) 意欲低下領域尺度 (下山, 1995) : 全 15 項目から構成される。5 件法 (1. あてはまらない～5. あてはまる) にて実施した。(2) 学校嫌い感情測定尺度 (古市, 1991) : 全 12 項目から構成される。5 件法 (1. あてはまらない～5. あてはまる) にて実施した。(3) 青年版心理的居場所感尺度 (則定, 2007) : 全 20 項目から構成される。5 件法 (1. あてはまらない～5. あてはまる) にて実施した。大学内において普段から最も接触する人物もしくはグループを思い浮かべてもらい, その人物との関係性を記述させた後, 尺度に回答させた。その後, バイトや課外活動など大学外において普段から最も接触する人物もしくはグループを思い浮かべてもらい, その人物の関係性を記述させた。具体的に思い浮かばない場合は“なし”と回答するよう指示した。その後, 具体的記載を行

った者のみを対象として、大学内居場所感と同様の手続きで回答を求めた。(4) フェイス項目：学年・所属・性別について尋ねた。なお、尺度 (1) と (2) の因子構造は池田ら (印刷中) に従った。

**調査手順** 無記名自記式の質問紙調査を集合法によって実施した。調査実施にあたり、本調査の主旨、調査に協力しないことで不利益が生じることはないこと、得られたデータは統計的に処理されるため公表された結果から個人が特定されることはないことを口頭および紙面によって教示し、以上の内容について同意できる者のみ回答し、回答を以って調査協力への同意とした。

**分析手順** まず、使用された尺度の記述統計量および信頼性係数が算出した。次に水口他 (印刷中) において見出された学生の類型を独立変数、学内での居場所感を従属変数とする一元配置分散分析を実施した。更に、学外における居場所の有無と学生の類型によるクロス集計表を作成し、 $\chi^2$  検定を実施した。

**使用機材** 統計解析には R ver.3.2.2 (R Core Team, 2014) を使用した。記述統計量および信頼性係数の算出のためにパッケージ “psych” (Revelle, 2015) を用いた。

## 結 果

**記述統計量** 本研究に使用された全ての尺度の記述統計量と信頼性係数を算出した (Table 1)。意欲低下領域尺度の全体の信頼性は  $\alpha = .72$ 、学校嫌い感情尺度の全体の信頼性は  $\alpha = .88$ 、青年版心理的居場所感尺度 (学内) の信頼性は  $\alpha = .96$  であった。次に、クラスタごとの記述統計量を算出した (Table 2)。

**クラスタの各類型と学内での居場所感** 水口・高野・池田 (印刷中) で得られた 3 つのクラスタ「転出渴求群」、「不活発怠学群」、「大学適応群」において、学内での居場所感に差があるかどうかを検討するため、クラスタを独立変数、学内での居場所感を従属変数とする一元配置分散分析を実施した (Table 3)。分散分析の結果、クラスタに有意な主効果が認められた ( $F(2, 282) = 6.94, p < .001$ )。そこで、Tukey 法による多重比較を実施したところ、「転出渴求群」は「不活発怠学群」と「大学適応群」よりも学内での居場所感を感じていない傾向があることが明らかになった。また、「不活発怠学群」と「大学適応群」では、大学内での居場所感に差は見られなかった。

**クラスタの各類型と学内・学外での居場所の有無** 「転出渴求群」、「不活発怠学群」、「大学適応群」の 3 クラスタ間において、学内と学外での居場所の有無に差があるかどうかを検討するため、クラスタと学内外での居場所の有無によるクロス集計表を作成し、 $\chi^2$  検定を実施した (Table 5)。 $\chi^2$  検定の結果、有意な差は見出されなかった ( $\chi^2(2) = 0.03, p = .99$ )。

Table 1

意欲低下尺度と学校嫌い感情尺度および青年版心理的居場所感尺度(学内)の記述統計量と信頼性係数( $n = 285$ )

	$\alpha$	$M$	$SD$	$SE$	$Min$	$Max$
意欲低下領域全体	.72	37.53	7.73	0.46	20	58
学生生活意欲低下	.70	11.45	3.64	0.22	5	23
授業意欲低下	.77	6.75	3.14	0.19	3	15
学習意欲低下	.60	11.25	3.02	0.18	4	20
注意散漫	.52	8.08	2.48	0.15	3	14
学校嫌い感情全体	.88	24.31	7.85	0.46	12	59
大学嫌悪	.87	21.25	6.70	0.40	10	50
転出希求	.79	3.06	1.78	0.11	2	10
居場所感(学内)	.96	71.73	14.05	0.83	24	100

Table 2

クラスごとの意欲低下領域尺度と学校ざらい感情尺度および青年版心理的居場所感尺度の記述統計量

	転出渴求群 ( $n = 34$ )					不活発怠学群 ( $n = 109$ )					大学適応群 ( $n = 142$ )				
	$M$	$SD$	$SE$	$Min$	$Max$	$M$	$SD$	$SE$	$Min$	$Max$	$M$	$SD$	$SE$	$Min$	$Max$
意欲低下領域全体	39.91	9.34	1.60	20	58	42.82	5.46	0.52	32	54	32.90	5.70	0.48	21	47
学生生活意欲低下	14.47	3.43	0.59	8	23	12.09	2.93	0.28	5	20	10.23	3.64	0.31	5	22
授業意欲低下	7.06	3.33	0.57	3	15	8.54	2.84	0.27	3	15	5.31	2.54	0.21	3	15
学習意欲低下	11.03	3.51	0.60	4	18	12.28	2.40	0.23	6	19	10.52	3.11	0.26	5	20
注意散漫	7.35	2.23	0.38	3	12	9.91	1.99	0.19	6	14	6.85	1.98	0.17	3	12
学校嫌い感情全体	36.79	8.57	1.47	20	59	25.81	6.00	0.57	12	42	20.17	4.77	0.40	12	33
大学嫌悪	29.74	8.13	1.39	12	50	22.94	5.52	0.53	10	38	17.92	4.56	0.38	10	31
転出希求	7.06	1.48	0.25	5	10	2.87	1.10	0.11	2	6	2.25	0.67	0.06	2	5
居場所感(学内)	64.26	15.30	2.62	24	98	71.17	12.04	1.15	35	100	73.95	14.60	1.23	24	100

Table 3

学内での場所感を従属変数とする分散分析

要因	$df$	$SS$	$MS$	$F$	$p$	多重比較(Tukey) <sup>1)</sup>
クラス	2	2630	1314.9	6.939	<.001	1 < 2, 1 < 3, 2 $\simeq$ 3
残差	282	53436	189.5			

<sup>1)</sup> <は5%水準以下での有意な差,  $\simeq$ は n.s. を示す。

Table 4

学生の類型と学外での居場所の有無によるクロス集計

	転出渴求群	不活発怠学群	大学適応群	合計
学外居場所なし	14	45	60	119
学外居場所あり	20	64	82	166
合計	34	109	142	285

## 考 察

本研究では、水口ら (印刷中) で抽出した嫌悪感と怠学傾向における 3 クラスタ「転出渴求群」、  
「不活発怠学群」、「大学適応群」と大学生活における居場所の有無との関連について検討すること  
を目的とした。以下、クラスタごとの居場所感のあり方について考察する。

**クラスタの各類型と学内での居場所感** 水口・高野・池田 (印刷中) で得られた 3 クラスタにお  
いて、学内での居場所感に差があるかどうかを検討するため分散分析を実施したところ、「転出渴求  
群」は「不活発怠学群」と「大学適応群」よりも学内での居場所感がない傾向があることが明らか  
になった。水口ら (印刷中) によると、「転出渴求群」は、大学生活における他者との交流や居場所  
の認識が低いことから、大学全体に対する嫌悪感や不満感を抱いている可能性が示唆されたが、本  
研究の結果はその知見を支持するものといえよう。心理的居場所が大学生の不適応に対して負の影  
響を与える要因となると指摘されている (則定・上長・齊藤, 2008) ことから、「転出渴求群」に  
おいては、大学内に居場所を持たず、学生生活への意欲も低下していると考えられる。また、大学  
内に心理的居場所がないために、転出への懇願を抱いている可能性があるかと推察される。

また、「不活発怠学群」と「大学適応群」では、大学内での居場所感に差は見られなかった。「大  
学適応群」は、大学生活や学業に対する不満もなく、大学内での居場所感もあることから、対人関  
係を含めて適応的な大学生活を送っていると推察される。一方、「不活発怠学群」は、水口ら (印刷  
中) の研究において、大学生活における人間関係に関しての不満は低いものの、学業に関して消極  
的姿勢となっていることが示唆された。本結果からも、大学内における居場所があるからこそ、大  
学生活への不満は学業の不満に留まり、学生生活から退却することがないのではないかと推察され  
た。

**クラスタの各類型と学内・学外での居場所の有無** 「転出渴求群」、「不活発怠学群」、「大学適  
群」の 3 クラスタ間において、学内外での居場所の有無に差があるかどうかを検討するため、 $\chi^2$ 検  
定を行ったが、有意な差は見出されなかった。そのため、どの群が学外で居場所がある傾向にある  
のかは示されなかったものの、「転出渴求群」が「不活発怠学群」と「大学適応群」よりも学外にお  
ける居場所があるという結果が出なかったということは、“学業では無気力であっても、アルバイト  
やサークル活動など学業以外には積極的に取り組む学生” (笠原, 1976) と異なるタイプの群で  
あると考えられた。「転出渴求群」は、先述したように、「不活発怠学群」と「大学適応群」よりも  
学内での居場所感を抱いていない傾向がある、つまり、大学内での居場所感がないからといって、  
必ずしも学外に居場所があるわけではないということが示唆された。このことは、「転出渴求群」  
がどこに自分の拠り所を置いているのか、という問題がある。千鳥・水野 (2015) は、大学生活か  
らの退却を防ぐためには大学生活の様々な活動領域において何か打ち込めることが効果的であると  
指摘しているが、こうした活動の場を学内にも学外にも持てていないとなると、「転出渴求群」の学  
校不適応感が不登校や引きこもりにまで発展する可能性も無視できない。

**今後の課題** 本研究では、「不活発怠学群」と「大学適応群」が「転出渴求群」がよりも大学内  
での居場所を感じていることが示唆されたが、居場所の内容まで明らかにすることができなかった。  
部活動やボランティア活動など大学生が自由に選択できる活動と居場所感との関連について調査を

行った小畑・伊藤 (2001) によると、部活動を心の居場所としている者が多かったことから、適応的な大学生活を送るためには、具体的な居場所の内容を検討する必要がある。

なお、本研究では、一人暮らしの学生が多い大学で調査を行ったことや、学外での活動を重要視したことから、質問紙の回答において、バイトや課外活動など大学外において普段から最も接触する人物もしくはグループを思い浮かべてもらう際に、家族や身内は含まないと指定した。よって、もし家族に居場所を感じている対象者がいれば、学外に居場所があると回答する学生が増える可能性がある。さらに、インターネット上の居場所を含めて検討する必要がある。大学生を対象にインターネット上で友人がいるかどうかによる居場所感の比較を行った石本 (2008) によると、“インターネット上の友人関係は現実社会での友人関係を保管するものではなく、家族関係や恋人関係といった友人関係以外で居場所感を感じられないということを補完している”ことを明らかにした。SNSを利用した交流が活発である近年において、インターネット上の関係性が現実的な居場所感をどこまで補完しているのかを検討する必要があるだろう。また、「転出渴求群」において大学内に居場所がなく、大学外にも居場所を強く求めているということが示唆された。「転出渴求群」がどこに自分の拠り所を置いているのかを明らかにすることで、不適応や不登校といった二次障害の発生を防ぐことができる可能性が考えられる。

なお、「転出渴求群」は大学生活全般に居場所感がないという危険性がありつつも、調査に協力したということから、完全に大学から退却しているわけではない。そのため、何が彼らを大学に繋ぎとめているのかという点を検討することで、大学生活を適応的に送ることができる要因が明らかになると考えられる。

#### 引用文献

- 福田真也 (2000). 大学生の引きこもりと心身症 心身医学, 40, 199-205.
- 古市裕一 (1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 池田龍也・水口啓吾・高野恵代 (印刷中). 大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検討—意欲低下領域尺度および学校ざらい感情測定尺度の因子構造について— 広島大学心理学研究, 15.
- 石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の一側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要, 2, 1-6.
- 笠原 嘉 (1976). スチューデント・アパシー 精神科医のノート みすず書房 pp.3-15.
- 小畑豊美・伊藤義美 (2001). 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 14, 59-73.
- R Core Team (2014). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. (<http://www.R-project.org/>)
- Revelle, W. (2015). Psych: Procedures for personality and psychological research, Northwestern University, Evanston, Illinois, USA. (<http://CRAN.R-project.org/package=psych>)
- 水口啓吾・高野恵代・池田龍也 (印刷中). 大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検

- 討—学校嫌悪感と怠学傾向による類型化の試み— 広島大学心理学研究, 15.
- 則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 33-7.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達的变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 則定百合子・上長 然・齊藤誠一 (2008). 青年期の心理的居場所感が抑うつ傾向に及ぼす影響 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 1261.
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 千鳥雄太・水野雅之 (2015). 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文系学部の新入生を対象として— 教育心理学研究, 63, 228-241.

## 謝 辞

本論文は、第 1 著者と第 3 著者指導の下、広島大学教育学部心理学系コースで開講している心理学課題演習の授業において得られたデータの一部を用いて構成しています。本研究にご協力いただきました大学生の皆さまに感謝申し上げます。